

今月上旬、アフリカ大陸北部に生活する先住民族ベルベルの人々を訪問する機会があった。マグレブといわれる大西洋から地中海にかけての沿岸、国名ではチュニジア、アルジェリア、モロッコにかけて、平均標高が二五〇〇^{フィート}、東西に二四〇〇^{キロメートル}の延長をもつアトラス山脈がある。尾根から南側はサハラ砂漠の北端になるが、その南側斜面に生活する人々で、人口は一五〇〇万人程度になる。

その起源は明確ではないが、一万数千年前から存在が確認されている。ギリシャ文明からは「意味不明の言語を使用する人々」というバルバロイに由来してベルベルと名付けられたが、自身は「高貴な出自の人間」という意味のアマジグと名乗っている。現在では大半がオアシスの付近に定住して灌漑農業で生活しているが、一部は乾燥地帯でヒツジやラクダを放牧して一年に数回移動する遊牧生活をしている。

今回訪問したのはモロッコの砂漠に生活する人々であるが、住居に到達するのはなかなかの難行苦行であった。数年以前に完成したばかりのアトラス山脈を横断する道路の途中で降車し、そこから灌木がまばらに生育しているだけの標高二六〇〇^{フィート}ほどの砂漠を徒歩で一時間半も進行すると、彼方の窪地に住居であるテントが遠望できるようになる。湿度はほとんどゼロという気候で、大量の真水を補給しながらの移動である。

この砂漠に孤立したテントには三世代七人の家族が生活しているが、ここで現代の日本の社会からは消滅しつつある厚遇を体験することになった。ベルベルの家庭を訪問すると、どこでも最初に御茶が提供される。この風習は日本と同様であるが、ここでは真水は貴重という以上の存在で、あるとき水汲みに同行したが、断崖絶壁の細道を徒歩で約五時間かけて往復し、何個かのプラスチックタンクで運搬してきたものである。

食事は飼育しているヤギを一頭解体して料理し、盛大な宴会を開催してくれた。家畜は商品であるから、自分たちの食料にすることはなく、客人の来訪のときだけの特別のご馳走である。その食事の最中、四歳か五歳かの二人の子供が荷物を片手に砂漠の方向に出掛けるので質問したところ、待機している自動車運転手が空腹であろうから弁当を持参するということである。子供の速度では往復二時間半はかかる仕事である。

宴席には近隣といっても、半日ほど遠方の隣人が何人も同席していたが、突然、砂漠の彼方に大声で怒鳴っている。遠方を移動している米粒ほどの人影に、立寄って同席しろというわけである。もちろん知人ではない。これらの親切の理由を質問したところ、すべてのモノは神様から付与されたものであり、だれにも平等に分配するのが当然で、我々にも必要なモノがあれば、何物でも提供してやるという回答であった。

現在、先進諸国では所得格差の指標であるジニ係数が増大傾向にあり、日本でも近年、生活保護世帯比率が急増し、昨年は三%、実数で一五〇万世帯に接近し、史上最多となった。さらに放送番組で話題になったように、だれにも看取られることなく死亡している人々が、判明しただけでも約三万二〇〇〇人という驚愕の現実も社会の片隅に存在している。これが世界三位の経済大国の社会の実情である。

一般の対策としては社会保障制度の充実であり、子供手当も創設されたが、それは財政を圧迫するし、国民の自立精神も減退させかねない。一方、過酷な環境で生活する先住民族は社会保障制度のない社会で、近隣の相互扶助によって十分ではないにしても安定した生活を維持している。かつての日本にも存在した、相互扶助の精神を社会に再度導入することが必要であると痛感した旅行である。